

解説 02 英語の絵本を読みなおす

【課題のねらい】

方法にのっかって、文字情報、図像情報の分析手段の習得をめざします。

低年齢の子どもの読者を念頭に作成された英語の絵本の分析を通じて、文と挿絵の相互作用、音読に適した言葉や文体の選択など、絵本というジャンルの特性を理解し、絵本をコミュニケーションのメディアとして意識的に読む能力を身につけます。

【解説】

一見単純に見える絵本ですが、実際には精緻な配慮がゆきとどいた芸術作品といえます。優れた絵本は、幼児の言語感覚の育成や想像力の発達に大きな役割を果たします。単純な語彙や簡潔な表現は、わかりやすさだけでなく、様々な連想を誘うように計算されています。

低年齢の子どもの対象にするため、作家や挿絵画家は様々な限定のなかで工夫していますが、限定はむしろ創造性を生みだし、作品に奥行きを与えます。これは日本の俳句や和歌にも通じます。言葉のくりかえしや韻を踏むことでリズムが生み出され、口ずさんで楽しめるようになっています。

また、本の判型は、Beatrix Potter の作品のように小さな手で扱いやすい小型のものから、幼児が上に乗ったりできるような大型のものまであります。飛び出し絵本や触る絵本もあります。つまり、視覚だけでなく、五感に訴え、頭で理解するだけでなく身体で感じるように工夫されています。

低年齢の子どもは、独力で絵本を読めないことが多いので、たいてい年長者（おとな、兄妹、年上の友人など）といっしょに絵本を楽しみます。おとなは子どもを膝に乗せながら絵本を読んだり、子どもを寝かしつけるときに寄り添いながらいっしょにページをめくったりします。また、おとなと子どもが声をあわせて文を読んだり、とちゅうで絵本の内容について質問しあったり、絵本の枠から飛びだして、自由に想像を膨らませることもできます。絵本は異なる年齢や性別や環境の人間のあいだの大切なコミュニケーションのメディアになりえるのです。

絵本が扱うテーマは様々ですが、幼児にとって身近なテーマを扱うことが多いといえるでしょう。もちろん、どの絵本にも複数のテーマが隠されている可能性がありますから、テーマはひとつだけとは限りませんが、たとえば、*The Tale of Tom Kitten* は「しつけ」をめぐる母親と子どもの葛藤を扱っているといえますし、*Goodnight Moon* は眠りにつくまでの子どものようすをたどり、「お休みの時間」という、子どもが毎日体験する活動から休息に移行する時間の問題を扱っているといえます。

子どもにとって恐怖の対象になりえる夜は、同時に安らかな眠りをもたらすものでもあります。子ども部屋に徐々にしのびよる闇の表現に、夜の多面性がうかがえます。一方、窓の外で刻々と位置が変わる月は、その丸い形から、子どもに母親や親しいひとの顔を思い起こさせるかもしれません。

挿絵と文のレイアウトにも色々な効果があります。挿絵と文には相互作用があるのです。*Where the Wild Things Are* では、作品のクライマックスである大騒ぎの場面に向かって、少しずつ挿絵の占める割合が大きくなり、クライマックスでは挿絵だけになります。そして結末に向かって少しずつ文の量が増え、最後は文だけになっていきます。

このように挿絵の割合を増やすことで、緊迫感や迫力をもたらす、逆に余白を増やすことで安心感や落ち着きをもたらします。また、この作品では母親は姿を現しませんが、文中には、母親の言葉のなかの wild thing という表現が題名と呼応しています。

絵本の中には様々な仕掛けが隠されていますが、なかには *Goodnight Moon* のように、部屋の壁にかかっ

ている絵画が、おとぎ話やナーサリー・ライム（童謡詩）を連想させるものもあります。ほかの作品を視覚的に「引用」しているといえます。これも多層的な読みを誘う仕掛けのひとつです。

今回の課題への取り組みを通じて、絵本が分析の対象になりうることが確認できたと思います。英語の知識や言葉や挿絵への感受性が基本になりますが、さらに、芸術学、美術史、心理学、倫理学、教育学など、文学の隣接分野の知識も分析のときに役立つはずで、優れた英語の絵本を識別する力を身につけることは、児童英語の教材選別に役立ちますし、身近な子どもと接するときにも大きな助けになります。実際に子どもといっしょに絵本を読んでも、子どもの反応から学ぶことができるでしょう。自分なりの着眼点から絵本を読みなおすことで、色々とあたらしい発見をしてください。